



2013. 4. 10

No.176

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minakoginga@gmail.com

(連絡用)

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)

2013 野幌から春だよりです



3.5 オコタンペ北東尾根で春山を楽しむ

4月。ようやく北海道は春らしくなってきました。雪解けが進み、庭にシジュウカラも姿を現しました。野鳥のさえずりは春の喜びを歌っているようです。

今年の冬は、豪雪に振り回されました。自宅玄関が吹き溜まりで、開かなくなったり、一日中、雪かきに追われた日もありました。高齢者の方が、屋根からの落雪で亡くなったというニュースには、母の身にも起きるかもしれず、何度も安否確認で胃が痛みました。

山ともすっかり遠ざかっていますが、3月に春山を楽しめたのは嬉しかったです。その日帰宅すると携帯に友人の留守電があり、ご家族から、友人の死を知らされました。突然でした。心筋梗塞での急死です。私と同学年の杉本裕子さんとは、30数年前、旭川の「大雪と石狩の自然を守る会」で、活動を共にし、山にも一緒に登った親友です。昨年にも東京で再会したばかりでした。結婚後、熊谷市に住んでいて、葬儀には間に合わなかったけれど、3月15日、電車を乗り継ぎご自宅に伺いお参りしてきました。残されたご家族は、未だに信じられないとおっしゃっていました。自宅玄関前に裕子さんの愛車があり、裕子さんがずっと昔、熊谷駅に迎えに来てくれた日を思い出しました。

反原発運動でいつも先頭に立っていたIさんの訃報もありました。悲しく、残念でなりません。ご自分の命を削って、札幌だけでなく、ニューヨークや東京に行って、反原発を訴えたIさんの思いを、微力だけど

引き継いでいけたらと思います。

反原発は、あたりまえの主張をしているだけだという思いがありますが、経済優先の風潮に世論は押され気味ですね。2年前の福島事故をすっかり忘れてしまったかのようです。私は市民運動の事務局の責任の一端を担っていますが、リーダーシップを取るのが苦手で一会員として自由に活動したほうがいいのではないかと悩みました。

そんな時に高木基金助成金プレゼン（書類審査で通った団体）が3月16日に東京であり、二人で発表する機会がありました。多くの人に、泊原発の危険性を伝える講演活動を紹介しました。（下写真）2日後に「審査通りました」の通知メール

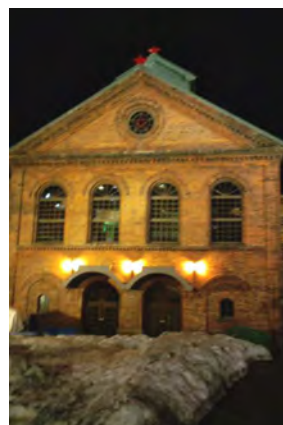
を受け取り、ホッとしました。まだ私がやれる役割もあるのではと思い直しています。高木仁三郎さんがまだお元気だった頃旭川で、市民が反原発を伝える出前講座をと提案された時に一緒にいら



していた方が、その場にいらして不思議な出会いに感動しました。

3月末に4年ぶりに台湾のハンセン病回復者の療養所を訪ねました。当時と変わらずお元気に暮らす人々にお目にかかれて懐かしかったです。その詳細は次ページをお読みください。

左写真は、レンガ作りのさっぽろビール園のライトアップです(4.5)



台北のハンセン病回復者の療養所を訪問して



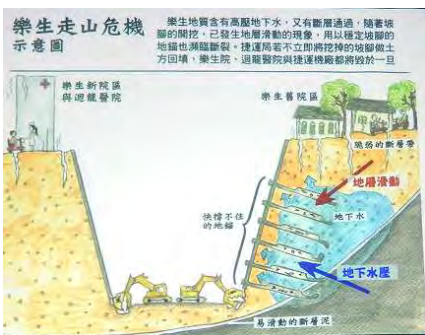
撮影・眞武薫さん 九州などからの弁護団や支援者たちと

北海道とハンセン病回復者をむすぶ会は、大きな活動はしていませんが、各地の療養所を訪ねたり、講演会などを10年間続けてきました。4年前に台湾の台北にある、回復者が暮らす樂生院を訪ね、当時、新ビル問題で揺れていた入所者さんを3月28日～31日の日程で再訪問することになりました。浅川さんが航空券の手配をしてくれたおかげで、格安ツアーでした。東京に2泊するより安い位。

樂生院は日本が台湾を統治していたころに設立された強制隔離施設でした。現在は、誰でも自由に入出入りしています。当時は1118人が入所していたそうですが、現在は185人です。29日、午前中は国立故宮博物館を見学後、樂生院を訪れました。この日は弁護団・研究者・その家族など、お子さんも含め16人が九州・関西・東京から参加されました。午後4時からのハンセン病人権促進会議との意見交流会に私たちも参加しました。行政相は日本の弁護団には大変敬意を表していました。2009年には入所者のみなさんに謝罪したと述べました。樂生院を世界遺産にする計画があることも話されました。

30日も地下鉄を乗り継ぎ樂生院へ。学生たちとの交流が一番心に響きました。この日、10人が集会所にいらしたのですが、パワーポイントを使って、樂生院のそばで建設中の地下鉄工事を具体的な調査をして危険だから場所を変えてと訴えました。このイラストが秀逸。何故危険かが言葉が分からなくても一目瞭然です。

3月16日には、台湾全土から台北にかけつけて、



樂生院を守ろうとデモが行われたそうです。その時の様子もパワーポイントで紹介しました。「六歩一跪」といい、六歩歩いて跪いて祈る行為です。それを2kmにわたってデモを

行なったとのこと。マイノリティの希望である樂生院を守りたいと訴える学生の優しさと熱意にジーンとして涙が出ました。

学生たちが日常的に療養所の人たちと接し、大事に思う気持ちさが素敵です。

今回の旅では反原発のお話を聴くことはできませんでしたが、現在、3基の原発が稼働し、4基目の原発が建設中



です。台湾總統は住民投票で、継続したいと考えているようです。福島事故で、台湾でも反対運動が強まっています。3月の反原発デモに約10万人が参加とニュースで伝えています。日本のニュースはリアルタイムで報じられているのも驚きでした。台湾の面積は36,000平方km、人口2,300万人ですから、10万人のデモがいかに大きいか想像がつきます。

台北市が3月28日に公表した世論調査では、「明日、住民投票が行われたら、投票に行く」との回答が71%、「建設停止に賛成」が66%に上ったと報じています。女性の関心が高いのは日本と同じですが、学生の意識の高さも大きいと、今回の訪問で強く感じました。療養所の集会室に掲げられていたNo more Fukushimaの文字に感じるものがありました。

唯一の観光は国立故宮博物館です。私たちは地下鉄とバスを利用して行きました。世界四大博物館の一つと言われ、宋・元・明・清と4時代を経て皇帝に愛された文物や、宮廷秘蔵のコレクションが多数所蔵されています。膨大すぎて、とても半日では回りきれません。各国から訪れた観光客でいっぱいでした。添乗員の説明がない分を、貸し出しのオーディオガイドシステムで、日本語の説明があり良かったです。次回訪ねるときは、歴史の勉強をしてから鑑賞したいと思いました。



観光目的ではないので、台北周辺しか見ることができませんでしたが街は活気がありスクーター

が疾走。信号が赤になると、何十台ものスクーターが一齐に並ぶのが壮観でした。地下鉄は縦横に走っていて安くて便利。乗り継いでも35元位（日本円で140円）です。バスは10分おきに走っています。食べ物はヘルシーで美味しいです。気候が亜熱帯気候で、年中野菜や果物が採れるからでしょうか？

今回、たくさんの写真をPCに取り込み中、間違えて削除。数少ない写真です。

本 BOOKS

原発と裁判官

なぜ司法は「メルトダウン」を許したのか

磯村健太郎・山口栄二著
朝日新聞出版 1300円＋税



朝日新聞記者が、これまでに原発訴訟に関与した裁判官に対して行ったインタビューなどをまとめたのが本書です。これまでの日本の原発訴訟において、裁判官はどう考え、どう判断してきたのかを、元当事者たちへのインタビューによって検証しています。私も泊原発の廃炉訴訟の原告で、何度か口頭弁論の傍聴をしましたが、原告団の弁護士が一方的に北電を追及するばかりで、北電側の意見陳述がないのがっかりしました。裁判から1年半。泊廃炉訴訟は現在のところ動きはありません。裁判官は原発にどう向き合ってきたのか関心を持って読みました。

志賀原発二号機訴訟で、当時の裁判長であった井戸謙一さんは「原発のような危険な施設を扱っている電力会社としては、多くの地震学者が集まって調査した結果、M7.6の地震がありうると言うのであれば『念のためそれを前提とした耐震設計をしましょう』という謙虚な姿勢になって当然だと思うんです。ところが、政府の地震調査委員会の分析の方が間違っている、自分たちが正しい、と主張する。甘い想定で『安全だ、安全だ』と声高に言っても裁判官はそれに乗るわけにはいきません。そのこと自体が、電力会社の姿勢として、いかがなものかと思いました」と語っています。この裁判では個人の生命や健康に関わる「人格権」かそれとも「公共の利益」かが問われました。井戸さんは「チェルノブイリ級の事故が想定できる以上は、住民が甘んじて受け入れられる限度には収まらない。生命・身体というのは何ものにも代えられない価値ですから、それを犠牲にしてまで守る公共の利益はありえない」と明快に答えています。その後の高裁で逆転敗訴。福島原発事故が起きたのはその半年後でした。

動燃・もんじゅ訴訟では、当時の裁判長、川崎和夫さんが、原子力安全専門審査会委員会の審査の甘さを指摘。20年に及ぶ訴訟で、「高速増殖炉『もんじゅ』に係る原子炉設置許可処分は無効である」と言い渡したのです。しかし、その後の最高裁ではこの判決が控訴棄却となり、くつがえされます。

住民敗訴の事件を担当した裁判官のインタビューでは、女川原発の上告審を担当した元原利文元最高裁判事が「事件の詳細はよく記憶していません」「2件の原発訴訟についても審議した記憶はありませんからおそらく調査官の意見通りに『上告棄却』となったケースだろうと思います」と述べています。この発言には怒りを覚えました。原告側の、調査、研究してきたことが生かされないのなら空しいです。今回の福島原発事故が、裁判を変えていくことに期待をしたいと思います。

泊原発廃炉訴訟が裁判官を変えていくパイオニアでありたいです。

アルバータ山のピッケルものがたり

絵と文：芳賀淳子 自費出版
1500円

アルバータ山のピッケルとは、1925年に榎有恒さんや淳子さんのお父

様（三田幸夫）たちがカナディアンロッキーの鋭鋒アルバータに初登頂した際に、頂上に残してきたピッケルのこと。登山界ではよく知られている話ですが、若い人には知られていません。

淳子さんは「今、語り継がないと消えてしまう」と本にした動機を語っています。

ピッケルは細川侯爵から託されたピッケルで登山家の間で「銀のピッケル」として伝説になりました。淳子さんは夫の孝郎さん（元日本山岳会副会長）と1996年にアルバータ山を訪れ、ジャスパーで「折れたピッケル」に初めて会いました。



絵本はピッケルケルがその後たどった数奇な運命を感動的に描き出しています。本体と石突きが離ればなれになってしまったピッケルが、70年あまりの時を経てついに再び一本に合体されるまでが、実話をもとに、美しい水彩画と、ピッケルの視点で一人称で綴られています。

私が好きな場面は、美しい山々と夜空に輝く星に見守られてケルンにしっかり立っているピッケルです。孤高の姿に感情移入して何度も見入りました。

「ぼくに会いに来てくれた俊太郎さん」は芳賀さん家族の名前を寄せ集めて決めたそうです。

淳子さんはお父様の残した大正時代の写真や、資料記憶に残る榎有恒さんの面影や、自身がアルバータの麓で描いたスケッチなどを生かして絵本を作ったといっています。淳子さんのお父様も天国で喜んでいるのではないのでしょうか？

ピッケルが多くの人の手を経て、淳子さん夫婦と再会する、温かくて、不思議な巡り合わせに感動しました。絵の力って大きいですね。素敵な物語を、是非若い世代に読んでいただきたいです。

購入申し込みはalberta1925@gmail.com又は090-4718-9252 芳賀さんまで。1700円（送料込み）

写真は3月4日に開かれた出版記念祝賀会での芳賀淳子さん（撮影・岡田秀二さん）



紅茶なきもち コミュニケーションを巡る物語

水野スウ著 mai works1200円(税込)

水野スウさんは、「いのちの未来に原発いらない」通信を年に数回発行されていて、私も長い読者です。

週に一度、自宅を開放して「紅茶の時間」を29年間続けてこられました。この場に持ちよられるさまざまなきもちを語り、聴く場が「紅茶の時間」です。スウさんは、精神保健福祉士の松浦さんに出会います。松浦さんは、心の病気をした人たちと、地域でともに生きていきたいと、東京の調布でワンルームマンションを借りて、一緒に食事をつくり、「おいしいねから元気になる場」を合言葉に、クッキングハウスを初めた方です。私もクッキングハウスの賛助会員として応援しています。そこではSST(Social Skills Training)を行っていました。SSTを繰り返すことで、病気のせいで失くしてしまった自信を取り戻していく、当事者の方たち。「一緒に考え、応援してくれる仲間たちがいて、安心感をもらえると実感できること」で、困難を乗り越えていく姿と「紅茶の時間」の場とつながるものをスウさんは感じました。

きもちのいいコミュニケーションのとり方は練習すれば誰の身にもつく、やさしい力なんだと、スウさんは紅茶の時間でも実践するのです。自分を解き放ち、自分らしくいられる場所って、多くの人が必要としていると思います。スウさんが「聴いてあげる」という態度ではなくて、同じ目線で、聴く人であり、語る人だからでしょうね。私なら、こんな根気のいる場をつくるのはとてもできないです。

私はつらい気持ちを人に語れないことが多い。自分をうまく伝えることができないから、こうして通信を発行しているのかも知れませんが。スウさんの「紅茶の時間」にいつか行ってみたいです。

本の問い合わせはmail@mai-works.comまで。

震災日録 記憶を記録する

森まゆみ著 820円+税

森さんが震災発生後1年間、東京の自宅から被災地に支援に通い、脱原発デモや志賀原発の地元取材した日々を、時系列で記録したのが本書です。

森さんは関東大震災や東京大空襲について、書き遺されたリアルタイムの日録を読んで、あとでまとめられた感想や記憶とは違うと、納得することがありました。「新聞やテレビは大所高所から報道する。私は26年間、『谷根干』で小所低所から人々のかそけき声を聞きとってきた。地域の日常を、被災地で見たものを聞いたことを書いておこうと決めた」とあります。

避難所への炊き出し、マンガと絵本を届ける旅。最大の被害が出た漁村部の宮城県石巻市、内陸の里山・丸森町とは震災前から深く関わってきた森さん。そこで出会った人々、再会した友人たちのかそけき声を細大漏らさず活字にしました。



東京での初の脱原発デモでは、歩く人にインタビューしながら、映像も撮りました。「福島からの電気を享受してきた自分が許せない」と語る人、「情報開示がなされていないのは腹立たしい」「経済が悪くなるというけど、その前に子どもがいなくなったらどうするの」など、たくさんの声を拾っています。

大震災で起きた膨大な諸問題の所在がくっきりと「記録」されその「記憶」を次代に伝えうる優れたルポです。



エンジェルフライト

国際霊柩送還士

佐々 涼子著 集英社1500円+税

海外で亡くなった人の遺体を遺族のもとに送り届ける国際霊柩(れいきゅう)送還を手がける会社「エアハース・インターナショナル」の仕事に迫った本作は昨年の開高健ノンフィクション賞を受賞しました。

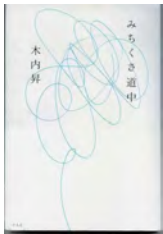
著者は、日本語学校の教師をしていた時、働きながら日本語を学ぶ生徒たちと接し、日本に暮らしながら外国語しか話せない孤独を思ったと語っています。さらに異国で亡くなるとなったらどんなに寂しいかと、本作を書いた動機を語っています。「エアハース」に、取材を申し込んだのは4年前。しかし「あなたに遺族の気持ちが分かるんですか」と、びしゃりと断られます。何度も足を運び、取材を許された現場では「ここまでやるのかという丁寧な仕事に、何度も驚かされた」と振り返ります。

「エアハース」の事務所は、東京・羽田空港内のビルにあります。海外から戻ってくる遺体は、皮膚が変色したり、傷ができていることも多い。その遺体を修復し、生前の姿に近づけて、遺族に引き渡すのが、木村利恵社長ら、世代も経歴もさまざまなスタッフ6人の仕事です。スタッフは遺体を拭き、傷口をふさぎ、顔の輪郭を修復し化粧を施し、「遺体を生前のみずみずしい姿に戻すのは、遺族が亡くなった人と向き合って、存分に泣き、死を受け入れて、お別れができるようになるためだ」と、送還士が語ります。

異国での過酷な死とそれに向き合おうとする遺族のさまざまな姿、そこに関わるスタッフの人間模様が取り上げられていきます。取材を進める過程で、著者自身「なぜ私はここまでして国際霊柩送還の取材をしたかったのだろう」と、何年も前に身近にあった一つの死と、向かい合います。

ニュージーランド南部地震で亡くなった学生たちや、シリアで殺害されたジャーナリストらの遺体はどうなったのだろうという疑問が、この本を読んで解けました。

3.11で多くの人たちが亡くなりました。残された家族の悲しみと絶望感。どうしたら傷を癒し、乗り越えていけるのかが問われています。本書は悲しみ尽くすことの必要性を訴えかけます。



みちくさ道中

木内昇著 平凡社 1400円+税

「漂砂のうたう」で直木賞を受賞した著者の初エッセイ。この本を読むま

で女性であることを知りませんでした。

そこには日常での気づきや、編集者時代に経験した出来事などが丁寧な文章で綴られています。著者は「人生の目標なるものを設定せずに生きてきた。いわば道草の連続が、今の私を形作っているとも言える」という。後悔しない人生よりも、悩んで悔いてもがいて生きる姿に胸を打たれるという、著者の地に足つけた生き方が伝わってきます。編集者時代の苦労や、直木賞受賞前後の心境や、ソフトボール部だった高校時代のエピソードなども面白かったです。どの文章にも、著者の凛としたたずまいの美しさを感じます。「じわじわと読む」の本の紹介が秀逸です。林芙美子の『放浪記』の紹介では「孤独を負い目に感じることはない。家族があろうが、友人が多かろうが恵まれた環境にあろうが、それは誰のかたわらにも存在する、至極当たり前のものだから。そうして、どんな状況にあろうとも、「それでも生きていく」というあり方こそが、人間のもっとも核にある本性なのだと、『放浪記』を読むと信じられるのだ」とあります。

内なる言葉には「人の内に生じ、蓄積されていく言葉は、ある力を持つ気がする。(略) 実感をともしない、血肉となった言葉は、たとえ発されることがなくとも、必ずその人のたずまいとなって周囲になにかを伝えるのではなかろうか」と書いています。

さっと読めてしまうエッセイが多い中、日常に新しい視点を与えてくれる明晰さと気づきに共感しました。私の文章にできないもどかしさを、的確に言い当てていると思いました。

梅棹忠夫

「知の探検家」の思想と生涯

山本紀夫著 中公新書 820円+税



本書は、梅棹忠夫の仕事と生涯を追った評伝です。著者は、学生時代から、亡くなる直前まで、梅棹さんに接してきた「最後の弟子」です。

著者は「梅棹の著作をとおして、何が梅棹をたぐいまれなフィールド・ワーカーに育てたのか、また逆境のなかで何が彼を著作に駆り立てたのか、そして、生涯をとおして彼が何をめざして生きてきたのか、という疑問を明らかにしたい。」と語っています。

「登山が生涯の原点」と言い、中学・三高時代は登山に没頭しています。私も登山をするので、1章の昆虫少年から探検家への項が抜群に面白かったです。だが太平洋戦争のさなか、梅棹さんは国策に従うべきだとする山岳部員と、あくまでも開拓者たらんとして行動をよびかけます。梅棹さんは20歳の時、白頭山を超えて、第二松花江源流を確認しています。登山家から探検家へ歩みはじめることとなります。

三高3年生の時には、樺太でイヌソリ性能調査にも加わっています。そのころから「発見の手帳」に、これはおもしろいと思った現象を書き続けました。随所に梅棹さんが描いたスケッチを紹介。観察力の素晴らしさに感動しました。著者は梅棹さんを「あくことなき好奇心、知識欲、包容力はもともとそなわっていたもので、自分に訓練を課すことによって、知的活動をさらにさかんにしていった」と書くのです。その後、学術探検で、ポナベ島、大興安嶺、モンゴルの草原へと、フィールドを広げていきます。今西錦司に大きな影響を受けつつ人類学、民俗学、生態学とさまざまな分野にまたがる仕事をしました。

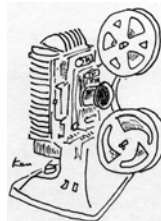
梅棹サロンには多くの若者が集まり、議論を楽しむ人でもありました。あらゆる機会にさまざまな言語を学んだ人でもあります。

65歳のとき、ウイルス性疾患で両眼の視力を失いますが、口述ワープロで全23巻の著作集の完成を果たします。凄いです。著者は敬意をこめて「梅棹は一生をかけて未知の領域に挑み、『終生探検家』とよぶにふさわしい人生を送ったのではないか」と書きます。「いちばん大切なのは未知なるものということ。未知のものと接したときつかんだときはしびれるような喜びを感じる」という言葉を残したことも紹介しています。

梅棹さんが生きていたら、100名山ブームを痛烈に批判されたかもしれません。この評伝を読んで、梅棹さんの本も読んでみたいと思いました。

福島 六ヶ所 未来への伝言

島田恵監督



泊原発の廃炉をめざす会が、福島事故から2年を前の3月9日に、上映会を開きました。ドキュメンタリー映画「福島六ヶ所 未来への伝言」です。



監督の島田恵さん(右写真)は「福島や六ヶ所の人たちの体験を共有することで、日本に暮らす私たち一人ひとりがこの問題をどう引き受けていくのか、この映画がそのメッセージとなり、未来への伝言となることを願っています」と語っています。

島田さんは、写真家として1990年から12年間、青森県の六ヶ所村に住み、核燃サイクル基地建设を巡って揺れ動く村民を撮りつづけてきました。2011年から映画作りを始めた1ヶ月後、東日本大震災が起きます。新たに原発事故が起きた福島も記録して、放射能の問題に迫ったのがこの映画です。

福島第一原発から5キロの大熊町に住んでいた一家は、避難先の東京で、第2子を出産。郡山市で代々続く農業を営む一家は、「米を作るのが農家」だからと、放射能に苦しめられながら、田植

えをし稲を刈ります。一番の衝撃は六ヶ所村で、親子3代にわたって漁業を営む一家が、マダラから基準値以上のセシウムが検出されたため、獲った魚を海に捨てるシーンでした。その悔しさが胸に迫り、涙があふれました。

この家族の、動燃反対の闘いの歴史も写真で紹介され、今もなお貫いている姿に感動しました。生活の場の海や山が破壊されていくさまや、原発を巡って人間関係も壊されていくのが悲しい。「海と山があれば生きていける」と語った漁師の言葉にすべてが込められていました。音楽も良かったです。福島を忘れてはならない。原発はハイロにしなければと改めて思いました。

吹雪で交通事情が悪いなか、3回の上映会で、延べ400人の人たちで会場はいっぱいになりました。



3.24 札幌大通りのサウンドデモで

★山に登る機会が少なくなりました。忙しさもあったけれど、私にもしものことがあっては母に申し訳ないと、セーブする自分がいました。今年は雪が多かったせいか雪崩事故も多かったようです。家族から「市民運動もいいけれど、家族も大事にしてよ」と言われます。母のそばにいるのは私だけ。今年の冬は足しげく通いました。

★本は電車の中でも、空いた時間にも読めるけど、映画を観る時間を作るのが大変でした。でも、2カ月の間にずいぶん観ました。そんな映画の数々をご紹介します。

★本を読んだ時、映画を観終わった時の余韻が大好きです。その時の思いを書き記す習慣がないので、いつも通信を出すときに慌てふためきます。本の紹介にも書きましたが梅棹忠夫さんという「知の探検家」はいつも発見の手帳に観察したことや、これは面白いと思ったことを、ちゃんとした文章で書いたそうです。私もおおいに見習いたいと思いました。

★2面の台北のハンセン病回復者が暮らす楽生院での集合写真と6面のサウンドデモの集合写真。不都合だったら申し訳ないのでメールが何度も行き来して、掲載の了解を得ましたが、転送はご遠慮くださいね。

故郷よ 仏・ウクライナ・ポーランド・独
アグニェシュカ・ホランド監督



プリピャチは「ゾーン」という立ち入り制限区域にあり、別名「死の区域」と呼ばれています。チェルノブイリから3キロ

離れた、原発作業員ら5万人が住んでいた町です。劇映画としては初めてチェルノブイリ近郊の立ち入り制限区域内で撮影されました。

チェルノブイリ事故によって、故郷を捨てざるを得なかった人々の望郷の念が、福島の人々の姿と重なります。

映画は原発事故の前日からはじまります。プリピャチは川の名前で、川ではボートに乗った恋人たちが戯れ、岸では原発技師の父と息子がリンゴの苗木を植えています。のどかな春の日、翌日の惨事を誰が予測できたろうか。その美しい光景が目には焼き付きます。4月26日は恋人たちの結婚式で、人々が川岸のパーティーで歌い踊っています。結婚式のさなか、夫に「森林火災が起きた」と呼び出しがかかり、次の日、妻のアーニャは病院に駆けつけるが、「彼は人間原子炉になっている。近づくな」と警告されるのです。10年後、アーニャは故郷を捨てられず、チェルノブイリの観光ツアーガイドとして働いています。フランス人の婚約者がいるが、母が今も住む故郷を捨てられません。

発電所技師のアレクセイは妻子を安全なところに避難させたが、住民に伝えることができず、大量の傘を買って、道行人に渡し、「雨に濡れてはいけない」とだけ伝えます。その後、技師は行方を隠します。10年後、避難先で成長した息子はいじめを受けます。荒れ果てた自宅を探し当て、父へのメッセージを壁に書く場面が切なかったです。福島の子もたちは避難先でどんな暮らしをしているのだろうか？

チェルノブイリの事故はいまも多くの人を苦しめ続けているのです。平和だったプリピャチの人々の日常が、事故後一変。放射能の危険性についての真実を何も知らされずに「黒い雨」に身をさらしてしまい、その後避難を余儀なくされた住民たち。彼らを覆い尽くす不安が、福島原発事故に翻弄された人々の姿と重なり、悲しさと悔しさが胸に迫りました。

事故の1週間後にオープンする予定だった大観覧車(写真)が人の住まないプリピャチの悲しさを象徴しているようでした。

アーニャを演じたのはウクライナ出身のオルガ・キュリレンコです。結婚式のにぎやかな音楽はよしとしても、随所に派手な音楽の挿入はそぐわない気がしました。静かに訴えるほうが、原発の怖さを伝えられたのではと思いました。

東京家族

山田洋次監督



瀬戸内の小島から上京し、自分の子どもたちと久しぶりの再会を果たした老夫婦の姿を通して現代の家族を見つめます。

都会で暮らすそれぞれの生活に老夫婦が起こすさまざまな。家族のふれあいとすれ違いが淡々と穏やかに描かれています。

この作品の準備中に東日本大震災があり、脚本を書き直したそうです。次男の昌次（妻夫木聡）と、被災地でのボランティアで知り合った婚約者紀子（蒼井優）が、物語の後半をリードします。

母とみこを演じる吉行和子が良かったです。昌次に素敵な恋人がいることを知ったときの嬉しそうな表情がチャーミング。好きな女優さんです。

長男家族や長女家族にも、それぞれの事情があるのんびりと休日を通り越せません。老夫婦は、ホテルに泊まらざるを得なくなります。昌次は、舞台作りのアルバイトをしていて定職にはついていません。現代がいかにもともに働くことが出来ないかは、とても他人事には思えなかったです。ドラマチックな展開があるわけではありませんが、本当の幸せって何かという問いかけがあり、心にしみました。

ラストに美しい瀬戸内海が映し出されます。その向こうに祝島があり、その対岸に原発建設予定地がありました。

東ベルリンから来た女

独 クリスティアン・ペッツォルト監督



ベルリンの壁崩壊の9年前。1980年、東ベルリンから西側に移住を希求する医師のバルバラ（ニーナ・ホス）が田舎町の病院に赴任します。バルバラの行動や私生活に、常に

秘密警察（シュタージ）の監視の目が光ります。東西に引き裂かれたドイツで、人間として自由に生きていくこととは何かを考えさせます。サスペンスをはらみながら抑制の利いた語り口で、ドラマが進行します。

誠実そうな上司の医師アンドレは、かつての医療ミスで左遷され、シュタージに協力する任務を担っています。バルバラは、恋人のいる西側に逃れたという思いと、医師として良い医療を続けたいという思いとで揺れ動きます。

アンドレはバルバラの医師としての力量を信頼し、患者の治療に助言を求めます。

誰にも心を許さなかったバルバラの内面に少しずつ変化が現れます。周囲を寄せ付けない表情が、入院した不憫な境遇の少女に接するうちに、何とか救いたいと思うようになるのです。

職務に忠実なシュタージのまなざしを通して監視国家の真実を描いた『善き人のためのソナタ』と同じ時代を生きたヒロインの葛藤の末の決断を、全く逆の角度から描いていて、政治的に分断されていた頃の、息苦しさを伝え圧巻でした。

自由に生きられることのなんとありがたいことか！

音楽も台詞も抑制されて、だからこそ、見る側に想像力が要求されますが、心に深く残りました。

シュガーマン 奇跡に愛された男

スウェーデン・イギリス

マリク・ベンジェール監督

音楽には全く疎い私です。知られざるアメリカ人シンガー・ソングライター、ロドリゲスの人生の軌跡を追いかけた映像と音は、第85回アカデミー賞の長編ドキュメンタリー賞に輝きました。



1968年、ミシガン州デトロイトの場末のバーで、ロドリゲスが歌っていました。その姿が大物プロデューサーの目にとまりデビューアルバムをリリースします。しかし将来を囑望されるも、2枚目のアルバムも含めて、商業的には大失敗に終わります。ロドリゲスも誰の記憶にも残らず、跡形もなく消え去ります。しかし運命に導かれるように海を越えた音源は、反アパルトヘイトへの機運が盛り上がる南アフリカの地へ渡り、ロドリゲスの音楽は体制を変えようとする若者たちの胸に突き刺さり、革命のシンボルとなり50万枚以上の驚異的な大ヒットを記録します。その後、南アフリカでは、20年に渡って幅広い世代に支持され続けローリング・ストーンズやボブ・ディランより有名なアルバムとなるのです。しかし本人は一度も南アフリカを訪れることもなく、「ステージ上で頭を撃ち自殺した」「獄中で薬物中毒で死んだ」といった噂だけが流れていました。

いまはもうこの世にいないだろうという扱いを受けていたロドリゲス。その存在に改めて光を当てたベンジェール監督もロドリゲスに魅了されたことが伝わります。お金には縁がなかったけれど、魂が自由で内面も豊かな人であることを、さまざまな人が証言します。

ロドリゲスを探しているという記事を偶然読んだ娘から、連絡が入ります。ロドリゲスは、デトロイトの質素な家で生きていました。人生の大半を労働者として生き、自分の人生を全く卑下することもなく、市民運動にも加わったというのです。娘たちは「貧しくても心豊かに育つように、美術館などにも良く連れて行ってもらった」と語ります。70年代の雰囲気や表現する音楽の素晴らしさと、ロドリゲスの清廉な生き方が素敵です。ずっと聴いていたい

渡したバトン ふじら原発

脚本 ジェームス三木 監督 池田博穂

全国初の住民投票を1996年に実施し、原発建設計画を撤回させた巻町（現新潟市）を舞台にした映画で、25年間の住民運動を描いています。

原発建設計画の浮上をきっかけに住民が翻弄（ほんろう）されていく様子が描かれています。巨額の補償金を得ようとする漁協や地元経済の発展に期待する町民、一方で健康不安から建設に反対する主婦など、賛成派と反対派の双方の町民の心情が丁寧に描かれていました。私は試写会で、一足早く見ました。

次女・五十嵐早苗役で出演した中原果南さんはインタビューで「五十嵐家のなかで真っ先に原発のおそろしさを感じたのは、結婚、出産を経験した早苗でした。本能的に怖さに気がついたんですね。『核兵器とか原発とかがくっついたバトンをそのまま子孫に渡していいのかわかると、チェックするのが私たちの世代の責任』というセリフがありますが、東日本大震災・原発事故以降、このまんまの地球で、日本で大丈夫？と多くの人々が感じたはずで、私もその一人です」と語っています。（「新婦人しんぶん」1月31日付より抜粋転載）

五十嵐家も原発誘致賛成と反対に分かれますが、真の幸せって何だろうと考え、気づきます。劇映画だから率直に意見を闘わすことが出来たと思うし、珊瑚屋主人の父が、誘致すれば子どもたちにお金を残せると最初は賛成しますが、「幸せはお金では買えない」と変わっていきます。

挿入歌が良かったです。「原発いらぬ山が好き 原発いらぬ海が好き」豊かな自然が残っていたら生きていけるのです。巻町の原発を選ばなかった住民に敬意を表したいです。安心して暮らしたいです。スーパーで生産地を選んで買わずに済む世の中であって欲しいです。

4月20日（土） 共済ホール
（中央区北4西1）
一般前売1,000円（当日1,500円）
小中高生800円（当日のみ）
<4回上映>

①10:00 ②13:00 ③15:45 ④18:30
（いずれも開演時間。開場は30分前です）

チケット扱っています。090-6870-9225
又はminginga@agate.plala.or.jpまでご連絡ください。
私も20日14:45～16:15まで上映会ボランティアをします。

2.19 ノーマ・フィールドさんが語ったこと



2月19日、「ノーマ・フィールドさんと多喜二・脱原発を語る集い」がありました。小野有五さんとの対談です。

『小林多喜二』（岩波新書）や、『祖母のくに』、『天皇の逝くくにで』などの名著、源氏物語の研究で世界的に著明なノーマ・フィールドさん（シカゴ

大学教授）は、泊廃炉訴訟の原告にもなってくださっています。

私は受付で話は十分には聴けませんでした、印象的な言葉を紹介します。

アメリカも原発大国ですが、30年間原発がつくられていません。しかし、福島原発事故は収束したように多くの人々が受け取っている。

運動を最も必要としている人々が、実は、その運動に参加することが困難な立場に置かれていること、そのような人々にどのようにして運動に加わってもらうのが、多喜二の最大の関心事だったと述べました。原発を立地している地域の人々は、健康を案じながらも脱原発を主張しない状況がある。ノーマさんはこうした状況を「不安の格差」現象と指摘しました。

「不安の格差」状況下にある人々は、「運動を最も必要としているのですが、その運動に参加することが困難な立場に置かれている人々」でもあること。福島の現実、今こそ、多喜二の視点の大切さを浮き彫りにしています。

岩波新書の『小林多喜二』を読んだのに、多喜二の思想をきちんと受け止めていなかったことに気づかせていただきました。

発行が大変遅れて申し訳ありません。7月には25周年を迎えます。健康であったからこそ続けられたことに感謝しています。読者のみなさまと記念会が開けたらいいなと考えています。ご賛同を頂けると嬉しいです。（み）

購読料をありがとうございます（敬称略）
2013.2.1～4.20

水野スウ（津幡町）太田朋子（鎌倉市）カンパ
関口興洋（北九州市）カンパ含む 藤本雅子（札幌市）片岡次雄（函館市）切手 菅沼宏之（札幌市）カンパ含む 片山篤子（札幌市）カンパ含む 森内実江（江別市）切手も 坂井京子（旭川市）カンパ含む 仲俣善雄（札幌市）芳賀淳子（札幌市）著書「アルバータ山のピッケル物語」
計15,000円と切手40枚は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。